

様式

若手研究者育成支援費に係る研究成果報告（ホームページ用）

	(所 属)	(職 名・学 年)	(氏 名)
研究者	文学研究科博士後期課程 歴史学専攻	D2	山本 倫弘
研究の 名称	中世前期における伊勢神宮権力の展開と在地社会 ～遠江大福寺を中心として～		
研究のキ ーワード	権門体制論、伊勢神宮、神戸、神明宮、御厨・御園、在地社会		
研究の 概要	<p>伊勢神宮は、律令制下、私幣禁断の天下宗廟と呼ばれる存在であったが11世紀以降、東海地方を中心に御厨・御園と呼ばれる多数の荘園を有し朝廷、鎌倉幕府とともに国政を担う一権門へと大きく性格を変え、さらに13世紀以降には多くの参詣者が集まる信仰対象へと展開していく。伊勢神宮の中世的転換過程を探るためには、常に伊勢神宮と接触する立場にあった神宮の財政基盤、神領の支配形態の分析が重要である。そこで、当研究では律令制下に設置された伊勢神宮の財政基盤「神戸」の支配形態の変遷の分析を通じて、神戸を拠点に伊勢神宮権力（武力のみならず宗教的権威）も含む）が伊勢国内外地域へと拡大していく過程の解明を目的とする。</p>		

<p>研究の背景</p>	<p>黒田俊雄氏が提唱した権門体制論によって、朝廷、寺社、幕府の権門と呼ばれる政治的権力を有した諸勢力が、相互に補完しながら日本の中世国家を構成していたことが明らかにされ、各権門の中世社会のなかの位置付けを重視する研究へと発展し、大いに成果を挙げてきた。しかし、神社史研究は寺院史研究と比べて立ち遅れている。特に①思想、②神社組織、③神領研究の各分野の研究が個別分散化している状況にある。本研究では伊勢神宮を題材に①～③を総括したうえで伊勢神宮が権門として中世国家のなかで果たした役割を明らかにすることを目的とする。</p> <p>中世伊勢神宮組織は、祭主、大宮司、祢宜の3つの組織で構成されていた。この3者の関係については、3者が協力関係とみならず説、祭主の一元的統合支配を行っていたとする説が存在する。しかし、三者間の位置付けが曖昧なうえに中世伊勢神宮成立の画期である神領の拡大が議論に組み込まれていない。そこで、本研究では中世伊勢神宮組織による神領統治システムの解明を通じて三者間の関係を明らかにするとともに、朝廷、幕府の関係にも注目していく。</p> <p>伊勢神宮の神領には律令制下で設置された神戸、11世紀に拡大する御厨・御園が存在した。「神戸」は大宮司が管轄する神社奉仕集団を指したが9世紀以降には四至榜示を持った荘園へと転化する。「御厨・御園」に先行する「神戸」には伊勢神宮による神領統治の原初形態が存在するものと考え、院政期から南北朝期までの伊勢神宮による神戸支配の変遷を探ることで伊勢神宮の権門としての独自性を明らかにする手がかりとしたい。</p>
<p>研究手法</p>	<p>① 伊勢神宮領神戸旧域のフィールドワーク 《対象地域》 宇陀神戸（奈良県宇陀市）・伊賀神戸（三重県伊賀市）、 浜名神戸（静岡県浜松市）・飽海神戸（愛知県豊橋市） 《調査内容》 神明宮、有力寺院の分布調査、氏子・檀家圏の聞き取り調査、 御厨・御園旧域における地理条件の調査、 ①宮文庫（伊勢市）・大福寺（浜松市）への古文書調査 ②古記録・古文書・考古資料（棟札・懸仏）の博搜、分析</p>

<p>研究の進捗状況と成果</p>	<p>中世伊勢神宮領神戸の支配形態の変遷の特質は次の通りである。</p> <p>①律令制下、神戸は神社の修造や祭祀運営に従事する人的集団を指した。伊勢神宮は神戸を祭祀の財政基盤とし、その経営は、神戸内人事・裁判権を握る祭主、神戸財政担当の大宮司、内宮・外宮の祭祀運営を担った禰宜の神宮内三組織と神戸在住の神戸司の共同運営であった。</p> <p>②神戸地域の住人は、天照大神降臨神話を根拠とした擬制的な「神戸百姓子孫」として位置付けられ、代々の神宮奉仕が求められていた（＝「神戸百姓子孫」の論理）。</p> <p>③12世紀、「神戸」は神戸百姓子孫の官人化などの原因によって人頭支配が破綻し、神戸集団居住地の領域支配へと転換する。結果、神戸は「四至榜示」を持つ領域型荘園へと転換する。「神戸百姓子孫」の論理は、11世紀以降、活動が活発化する神人編成の原理として継承される。</p> <p>④神戸領域には天照大神を祀る神明宮が設置され、式年遷宮などの伊勢神宮と同様の祭祀を行うことで、伊勢神宮の宗教的權威の再生産を行った。また伊勢神宮への年貢輸送は年中行事として儀式化されたものであった。</p> <p>⑤11世紀以降、神戸周辺部は神戸住人による開発が行われ、神領が拡大していく。開発された土地は禰宜庁管轄の神領、御厨・御園として位置付けられ、神戸から独立する。新たに形成された御厨・御園は、神戸内の一村落レベルであり、そこに設置された神明宮は、周辺寺院と結びつき村落内の自治共同体の形成と維持に大きな役割を果たした。</p> <p>以上のように、先行研究において中世伊勢神宮の特質とされてきた御厨・御園の拡大とその支配形態、神人の広範な活動の起源は律令制下に設置された「神戸」の中世的発展過程のなかに求められるのである。そして、神明宮祭祀を媒介に神領地域に根付いた伊勢信仰は、神領内共同体秩序の維持機能を果たすとともに、在地社会のなかに伊勢参詣を促す機運を生み出したのである</p>
-------------------	---

地域への研究成果の還元状況	11世紀以降、東海地方を中心に分布していた伊勢神宮領内に創建された天照大神を祀る神明宮は、周辺住民が氏子となり維持管理を行い、自治の拠点としての役割を果たしてきた。その伝統は、近代でも神明宮の近隣への公民館設置などの形で利用されてきた。しかし、戦後の社会構造の急速な変化にともない、神明宮の廃止や合祀が進行している。上記の史実を踏まえ、寺社の統廃合を記録することは、かつての自治共同体形成の核、その編成原理そこで営まれた人々の生活と文化を後世に伝えることを意味する。また前近代研究において、景観復元への利用も期待される。
今後の期待	本研究を通じて、鎌倉後期までの伊勢神宮領の実態が明らかになったことで、神領興行令の実態分析に寄与されることが期待される。
研究発表	なし